第二の人生は波乱の人生！？

黒一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
第二の人生は波乱の人生！？

【Ｎコード】
Ｎ９１３２Ｔ

【作者名】
黒一文字

【あらすじ】
（あらすじ変えました）
前題名『魔法先生ネギま！～第二の人生へと～』
生前は只の高校生だった。しかし、神の手違いで第二の人生を歩むことに。
「なんで！？」
ネギまとリリなのの世界で生活する物語。

感想待っています。

プロローグ（前書き）

初めまして。もう一つの作品『バカとある兄妹と召喚獣』を見た方はどうも。これからは交互に更新するかもしれません。どうぞ、よろしくお願いします。

プロローグ

俺はいつもの日常のように高校に通い、そして、いつもの日常のように帰宅するはずだった。

いきなりトラックが突っ込んで――――

――――俺の１６年の生活が幕を閉じた。

「うぅっ、ここは」

目を開けると何もない空間にいた。

確か俺は死んだ筈なのに。

「それは私が呼んだのです」

声をした方向を見るとそこには見た目１５歳ぐらいの少女がいた。

「この度は申し訳ありませんでした」

うん、とりあえずトラックが突っ込んできたのは私の不手際ですって所かな。

「あなたはエスパーですか？」

うん、俺にはそんな力は無い。

「とりあえず、こちらの偽善としてあなたを転生させます。どこがいいですか？」

う～ん、迷うな。あ、あれでいいか。

「じゃあ、ネギまの世界で」

「わかりました。どのような力が欲しいですか？」

「えと、それじゃあ――――」

・不老不死
・デバイス、ユニゾンデバイス
・魔力、気最大級
・とあるシリーズのテレポートと一方通行のレベル５＋幻想殺し・・

・・・だっけ？
・変身能力
・魔法媒体の指輪

「ず、ずいぶん多いね」

「しょうがないよ」

「変身能力か・・・・・・元の姿は？」

「あんたの姿を１０歳ぐらいで」

「つまり女の姿？」

「ああ。女子の生活も体験したくてな」

「デバイスは？」

「待機はネックレス。起動時は杖のベルカ式で。カートリッジは３０発」

「ユニゾンデバイスは？」

「リインフォース２（ツヴァイ）と同じで」

「・・・・・よし。あと時間は？」

「大戦の時でなるべく『紅き翼』がいるところの近く。そうだな、ナギ達がしゃぶしゃぶしているとき」

「OK。終わったよ」

「ありがとな」

「いえいえ。それではいってらっしゃい」

こうして、俺は第二の人生を歩み始めた。

プロローグ（後書き）

作者執務室

??「ここは？」

作者「ここは俺の執務室だよ」

??「執務室？」

作者「この小説の管理所だよ」

??「で、何で??なの？」

作者「名前がまだ出てきてないから。ちなみに名前は決まっているから」

??「そうなんだ」

作者「それじゃ次回、『紅き翼との出会い』」

??「よろしくお願いします。感想待っています」

プロローグ2（前書き）

今回は主人公の名前とデバイスの名前を決めました。

プロローグ2

「う～ん。ここどこ？」

目覚めると私は森の中にいました。

「て、あれ？私の口調が変わっている」

パサッ

「ん、神様からの手紙？」

とりあえず読むことにしました。

『これを読んでいるときにはもう着いていることでしょう。自分の名前を決めたらこの紙の下に書いてください。あなたが頼んだ能力の他に魔法の心得を追加しています。デバイスはあなたの首にかかっています。あなたが名前をあげてください。ユニゾンデバイスの方はもう少しかかります』

「これかな？う～ん・・・・・決めた。あなたの名前はキリエだよ」

『了解しました。主』

「私の名前どうしよう。日本人名前の方がいいな・・・・・あ、あれでいいや」

かきかき・・・・・

私はこう書いた。

――――結衣咲　シィ

プロローグ2（後書き）

作者執務室

結衣咲「やっと名前が出た」

作者「うん、名前は適当だよ」

結衣咲「で、何でシィなの？」

作者「外見的に外人だからハーフということに」

結衣咲「私の設定は」

作者「次回だよ」

結衣咲「楽しみ」

ガチャッ

？？「あ・・・・・誰だっけ？」

結衣咲「あ、どうも。結衣咲シィです」

？？「ご丁寧に。俺はクレス・エスティードだ。くれすでいいぞ。で、作者。この子が新しい小説の？」

作者「そうだよ」

クレス「『バカとある兄妹と召喚獣』の方は遅れるなよ？」

作者「わかっているよ」

結衣咲「そ、それでは感想待っています」

設定（前書き）

今回は結衣咲シィの設定です。

設定

結衣咲（ゆいざき）シィ

年齢　外見１０歳

身長　もとの姿で１３２

体重　秘密

能力

魔力、気

最大級

テレポート＆一方通行＆幻想殺し

とあるシリーズから。

魔法の心得

あらゆる魔法が使える。

不老不死

老けないし、死なない

変身能力

自分が想像したものに姿を変えることができる

デバイスについて

待機型はネックレス。戦い時にはなのはのレイジングハート、シグナムのレヴァンテインなどのモードとして戦う。バリアジャケットはその武器の使用者のバリアジャケットを纏う。

設定（後書き）

作者執務室

結衣咲「ねえ、作者」

作者「なに？」

結衣咲「幻想殺し・・・・・て、ここではチートじゃないかな」

作者「大丈夫。あまり使わせないから」

結衣咲「それと今回言うことがあるじゃないかな」

作者「あ、そうだった。突然ですが皆様にアンケートを行いたいと思います。アンケート内容はこれです」

（1）、1・ナギと結衣咲を仮契約させる

2・ナギ以外と仮契約させる（ゼクト、ガトウ以外）

3・仮契約させない

（2）、1&2と答えた方に聞きます

どんなアーティファクトがいいですか？

結衣咲「私が仮契約させるかどうかだね」

作者「皆さんよろしくお願いします」

第1話　紅き翼（前書き）

作者執務室

ＰＶ１０２８

作＆結「・・・・・」

作者「えと・・・・・・シィ」

結衣咲「なに、作者？」

作者「六月八日の深夜一時に投稿したばかりなのに」

結衣咲「人気作品の力じゃないかな」

作者「そうかもね。この駄文を読んでくれた皆様、ありがとうございます。」

第1話　紅き翼

「で、ここからどう行けばいいの？」

『私のセンサーで探してみます』

はい、神様の手違いで死んだ結衣咲シィです。さっきから歩いているんだけどどこに行けばよいのだろうかと考えていたらキリエがセンサーを使ってくれた。

「あはは～、もう少し近くに落としてくれればよかったな～」

『主、現実逃避の途中ですが魔力を察知しました』

「ホント！ありがとう、キリエ！でどこに？」

『今主の視線から北東の位置です。距離は１００ｍです』

「よし、見つかったなら早速しゅっ――――」

キュル～

「／／／／／／お腹減った」

ナギｓｉｄｅ

オッス！俺はナギ・スプリングフィールドだ！今は詠春と師匠とアルで詠春の故郷の料理『鍋料理』を食べるところだ。

「じゃ、早速肉を～♪」

「あ、ナギ！おまっ、何肉を先にいれてるんだよ！」

「・・・・・」

「いいじゃねえか！旨いもんから先でよ！ホラホラ」

「バッ、バカ！火のとおる時間差というものがあってな――――」

「・・・・・」

「あーうっせ！うっせーぞ、詠春！・・・・・て、アル？師匠？どうしたんだ？」

さっきからだんまりだから気になったんだけど。

「お主等。きずかぬか？」

「「は？」」

「ええ、強大な魔力を持った誰かが近づいてきますね」

「あ、ホントだ」

『お、お腹減りました～』

「「「「・・・は？」」」」

今、何て？

「あ、いた。あはは～（バタッ）、あ、この川を渡ればいいんだね」

「「「「渡ったら駄目だ（です）（じゃ）！」」」」

シィｓｉｄｅ

た、助かった。いくら不老不死でも空腹は最大の敵だ。

「皆さん、ありがとうございます。お陰様で助かりました」

「いいってそれぐらいはお互い様だろ？」

「はい！それで・・・・・えと」

「どうかしましたか？」

「お礼をしたいので一緒に居ていいですか？」

駄目元でお願いしてみると――――

「おう、いいぜ！」

「「よろしく頼むな（お願いします）」」

「さっきの魔力もナギと同じ位じゃしのう」

・・・・・今思ったのだけどこんなに簡単に入れていいのだろうか。

「はい。あ、私は結衣咲シィです」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ。ナギでいいぞ」

「アルビレオ・イマです」

「ゼクトじゃ」

この人、何でこんなに小さいのにナギに師匠と呼ばれているのだろう？

「青山詠春だ。ところで結衣咲って――――」

「あ、出身は日本です」

「そうなのか」

「さて、鍋食おうか！」

それから私たちは軽い話をしながら鍋料理を食べていたら――――

ドゴンッ

――――剣が降ってきた。

いきなりだったので空中に舞った肉を取れなくて泣きそうになったらアルが肉を数枚くれた。

「あとでこれを来てください」

「スクール水着は露出が多いから、少ないものならいいよ」
アルは何でロリコンなんだろう？
「ナギ、私がいきたいからいい？」
「おう、いいぜ」
（キリエ、武器のみセットアップ）
（了解です）
キリエが起動すると手には某魔法少女のな○はが使っていた武器に似ている杖が握られていた。
「うお！」
「凄いですね」
「転移魔法の類いじゃろうか？」
うん、ゼクト。転移魔法の類いじゃないよ。
「それじゃ、いきます！」
私が行ったときに丁度詠春が敗れるところだった。
「キリエ、、カートリッジロード」
『分かりました』

ガシャンッ

「全力全壊「ん、なんだ？」スターライト～「うお！あいつか！」ブレイカァーー！！」

「グオアァーー！」

フフフ、いい威力だ。

三人称ｓｉｄｅ

これを見ていた紅き翼の皆はこう語る。

――――魔王・・・と

第1話　紅き翼（後書き）

作者執務室

作者「今日はオリジナルｒｏｏｍやａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！ｒｏｏｍ、そして新しく出来た魔法先生ネギま！ｒｏｏｍに誰もいないのでこれで終わります。感想待っています」

第2話　グレート＝ブリッジ奪還作戦（前書き）

談話室

シィ「なにこれ？」

作者「キャラが増えたし執務室だけじゃ狭いから急遽作った」

クレス「ある意味で凄いな」

ルナ「ま、いっか。それじゃ行くぞ～」

作者以外全員『『魔法先生ネギま！～第２の人生へと～』ユニーク１０００到達おめでとう！！』

作者「おお、皆ありがとう」

第2話　グレート＝ブリッジ奪還作戦

「よし、いくぜ！お前ら」

はい、どうも。結衣咲シィです。今は連合側のグレート＝ブリッジって言うところに来ています。

「ナギ！落ち着いて！まだ始まっていないから！」

「よし、俺もいくぜ！」

「ラカン！落ち着けと言っているだろうがーーー！！！」

「ぐふぉっ！」

全く。今回は全長３００キロに亘って屹立する巨大要塞「グレート＝ブリッジ」を陥落されたので奪還するという作戦が実行されます。

「・・・よし、時間が来たよ。ナギ」

「よし、行くぞ！」

「「「「「ああ（ええ）（うむ）（はい）！」」」」」

さて、行き（ちょっとまって）って、久しぶりだね。神様。

（ユニゾンデバイスが出来たよ。今から送るね）

あ、ちょっとま（シュンッ）

「「「「「ッ！？」」」」」

あ～あ。警戒体制に入ったよ。

（ご、ごめんなさい）

まぁ、いいけどね。何とかしようかな。

「みんな大丈夫。この子は無害だから」

とりあえず納得してくれた。理由はシィだからと・・・・・少し傷ついたよ。

「あ、そうだ。あなたの名前はリインフォース２（ツヴァイ）だよ」

ほんとは初代がいないけど。

「はいです、マスター！」

う～ん、リインはこれだから可愛いんだよねー。

「それじゃ、さっそくユニゾンしようか。リイン」

「はいです！」

「「ユニゾン・イン！」」

ユニゾンすると私の髪は白に近い色になった。

注）シィの元の容姿は金髪で腰までありツインテールにしています（リリなの・フェイトスタイル）。

「じゃ、いってくるね」

「あ、ああ」

私はとあるシリーズのテレポートで敵陣の上空へ移動、そして――

「キリエ、モード『夜天の書』＆『シュベルトクロイツ』」

『分かりました、主』

私は魔方陣を展開し、ある魔法を唱える。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて撃ち貫け、石化の槍。『ミストルティン』」

ナギｓｉｄｅ

「『千の雷』！」

ふぅ。つか、敵多すぎだろ！？

（ナギ、下がってください）

ん、アル？どうしたんだ？

（シィさんが何かしようとしています。あなたの上です）

アルに言われてみるとシィが魔方陣を展開して・・・・・て、何だ？あの魔方陣？

（ナギ、早く！）

お、おう。

俺が下がったら、石の槍が降ってきた。・・・・・あ、ええ！？石の槍が当たった奴等が石化した！？

・・・・・て、回復している奴がいるけど全く治らない。もしかして、永久石化付加の石の槍か？

そうしている内にシィが光線をはなって敵陣を後退させたので俺たちの勝利となった。

結衣咲ｓｉｄｅ

「おい、あの石化の槍はなんだよ！あいつら石化したぞ！」

「しかも、直せていませんでしたね。あちらには有力な治癒術師がいましたが」「あの魔方陣は何じゃ？見たこともないが」

「「皆　（皆さん）、落ち着いて（下さい）！」」

「「「「「落ち着いていられるか（ますか）！！」」」」」

「「ええ！？」」

戦闘が終わり帰ってきたらいきなり質問攻めされた。しかも、めったに怒鳴らないアルも。

（はあ。キリエ、リイン、言おうか？）

（私は構いません）

（リインも大丈夫です）

あれ？リインって自分のことリインって言ってたっけ？

「まずは石の槍。『ミストルティン』。
当たった奴を石化させる魔法。
なぜ石化が治らないか。それは、魔力の根元が違うから。
こちらの魔法使いは自分の流れる魔力を操り発動する。
それと違って私の魔法は自分の体内のリンカーコアという魔力源を消費して発動する。
因みに、私はこっちの魔法も使えるよ」

『そして、私はデバイスのキリエです』

「この子は武器となり、私を補助してくれる子だよ」

「リインはリインフォース２（ツヴァイ）と言うです。リインはユニゾンデバイスです！」

「「「「「ユニゾンデバイス？」」」」」

「ユニゾンデバイスは契約したものとユニゾン出来るの。ユニゾンすると魔力を増幅したり、そのユニゾンデバイスの魔法が使えるの」

「「「「「あーなるほど」」」」」

「するとリインさんはリンカーコアの方の魔法使いですか？」

「はいです！因みにリンカーコアを消費する魔法を使う人は魔導師とよばれるです！」

リイン、その知識どこから知ったの？

神様『私が入れました』

何か変な電波が来たけど無視しよう。

神様『ひど！？』

因みにナギが『千の呪文の男』と呼ばれると同時に私も味方から『幾多の武器の少女』。まあ、キリエのモードを切り替えるからね。敵から『終焉の悪魔』と呼ばれるようになった。

・・・・・何で？

第2話　グレート＝ブリッジ奪還作戦（後書き）

魔法先生ネギま！ｒｏｏｍ

ナギ「あれにはビックリしたな」

アル「まさか私達みたいな魔法使いじゃなく魔導師という存在がいたとは」

シィ「私は両方だよ？」

ナギ「俺たちにはりふかーコア？だっけ、そういう物ってあるか？」

シィ「リンカーコアだよ。・・・・・無いよ」

ラカン「ならお前は宇宙人か！？」

シィ「せめて異世界人って言って！宇宙人は皆同じだよ！」

アル「そのツッコミは違うと思いますが」

シィ「だーー！！うるさいうるさーーい！！」

作者「何かカオスになってきたからここまでとします。皆さん、まだアンケートは締め切っていませんのでお願いします。感想待っています」

第三話　（番外編その１）　シィは王女との会談・・・・・じゃなくてある場

作者執務室

作者「はい、アンケートが全く来ない小説を書いている黒一文字です」

結衣咲「・・・・・アホだ」

作者「なぜに『ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！』？」

結衣咲「『結衣』咲だから」

作者「・・・・・」

ガチャッ

作者「あ、クレスにルナにナギに吉井（バカ）」

吉井「なぜ僕だけバカなの！？」

吉井以外『バカだから』

吉井「みんな嫌いだ！！」

ガチャッ

クレス「ま、バカはほっといて――――」

作者&結衣咲『ん？』

『ＰＶ５０００突破おめでとう！』

作者「あ、ありがとう皆」

第三話　（番外編その１）　シィは王女との会談・・・・・じゃなくてある場

ナギｓｉｄｅ

「なんだよガトウ。わざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「あってほしい人がいる。協力者だ」

オッス。俺はナギだ。今回は奪還作戦の時に仲間になったガトウに呼ばれてメガロメセンブリアに来ている。

「協力者？」

「そうだ」

いきなり目の端に人が現れる。

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ。ウェスペルタティア王国・・・・・アリカ王女」

現れた人物は何か・・・・・姫子ちゃんに似ていた。

数十分後

あ～疲れた。話そうとしたらいきなり「幾多の武器の少女はどこじ

ゃ！」だからな～。・・・・・て言うか、シィはどこに行ったんだよ。念話は繋がらないし。一体どこですか～

某所

シィｓｉｄｅ

・・・・・あ

「はぁい！こちら結衣咲でーす！・・・・・て、何やってんの私は～！！」

はぁ・・・・・いきなり電波みたいなのに反応してしまった。
現在私は魔法世界から次元を切り裂いてきて地球のある場所に来ています。ですが――――

ズドォーンッ

町中なのに砲撃音が聞こえるのです。ま、まさか――――

「ディバインバスターー！！」

魔王がいたーー！！・・・・・どうしよ、これ。ま、いっか、とりあえず今はスルー「誰だ貴様　（ジャキッ）」おおぅ、誰だろ。何か殺気が凄いんだけど。

「もう一度問う。誰だ貴様」

「はい、結衣咲シィです」

「どうしてここにいる」

「言い訳に近いですけど・・・・・適当に。・・・・・すみません、とりあえず「カートリッジロード」逃げる！！」

理由を話した瞬間私は脱兎の如くにげた。すると、あの騎士が――――

「逃げるな！」

いえ、誰であっても逃げれる人は逃げます。

こうして私は騎士から逃げることが出来た。

??side

「・・・・・逃げられたか」

私はいきなり現れた10歳位の少女を問い詰めたが・・・・・何が適当だ。・・・・・ハッ、まさか主はやてに近づくものか！

『シグナム！ヴィータちゃんのところにいって！新しい仲間が出てきた！』

「わかった」

私はこの事よりヴィータのところに足を急がせた。

シィｓｉｄｅ

あの騎士がいるとはまさか――――

「ここ未来に来てしまったーーー！！！」

まさかのタイムスリップ！とりあえず、さっきの騎士に見つからないように姿を変えてと

※大体１０歳位の男の子で髪は肩にかかるぐらい

・・・・あれ？急に・・力・・・・・が

バタッ

？？ｓｉｄｅ

バタッ

ん、誰やろか？何か倒れた音がしたんやけど。

ガチャッ

「ええ！！」

どうしよ、男の子が倒れておる！

「ぅ・・・・・・ぅぅ・・・・・・お腹・・・・・・減った・・・・・・」

・・・・・お腹減っただけやな。

第三話　（番外編その１）　シィは王女との会談・・・・・じゃなくてある場

ネギま！ｒｏｏｍ

作者「はい、今回からまさかの魔王がいる世界にいきました」

ネギま！『何でだよ（ですか）（じゃ）！！』

作者「ん、皆どうした？」

ナギ「何で題名が俺たちの話なのに何で違うところなんだよ！！」

作者「魔法関係で」

ナギ「死ね！『千の雷』！」

作者「くっ、ベクトル操作！」

ナギ「ぐあぁぁぁーーー！！」

詠春「ナギ！」

アル「あなたもチートでしたか」

作者「当たり前だろ？」

アル「いえ、当たり前じゃないです」

作者「おい、空間魔法は反則だろ！」

アル「いえ」

作者「ぐあぁぁぁーーー！！」

ゼクト「あやつらは・・・・・『魔法先生ネギま！～第2の人生へと～』。感想、質問、アンケート、待っているぞい」

第４話　（番外編その２）衝撃の事実（前書き）

魔法少女リリカルなのはｒｏｏｍ

シィ「はい、今回も始まります『魔法先生ネギま！～第２の人生へと～』」

作者「・・・・・・」

なのは「どうしたの、作者？」

フェイト（Ｔ）「どうしたんだろ？」

シィ「ツユリ様に気にしていたことを速攻で撃ち抜かれて落ち込んでしまったの。私は結衣咲シィ。あなた達は？」

なのは「私は高町なのはです」

フェイト（Ｔ）「フェイト・Ｔ（テスタロッサ）・ハラオウンです。あの・・・・・」

シィ「ん、何かな？」

フェイト（Ｔ）「何で私の名前の後ろにＴがついているのかな？」

シィ「ああ、それは――――」

ピッ

魔法先生ネギま！ｒｏｏｍ　中継

フェイト（3）『やはり君はお子様のようだね』

ネギ『君はよくそんな無粋な泥水を飲めるね』

焔『あの・・・・・フェイト様』

神楽坂『ネ、ネギ』

焔&神楽坂『『早くしないとナギさん（千の呪文の男）が』』

フェイト（3）『む、それはまずいね――――』

ネギ『それはそうだね――――』

フェイト（3）&ネギ『『この勝負、いつか！』』

神楽坂『そんなことで勝負するなぁー！！』

シィ「――――と、いうこと」

フェイト（T）「あ、あはは・・・・・」

第４話　（番外編その２）衝撃の事実

シィ？ｓｉｄｅ

「・・・・・ん」

ああ、そういえば俺は倒れてしまったんだな・・・・・て、口調が変わってる！」

「わひぃあぁ！？」

どんな悲鳴だよ

「あんたは？」

「私は八神はやてや。君は？」

「俺は・・・・・」

ヤベッ、この姿の時の名前忘れていた。

「俺は？」

「・・・・・結衣咲結衣だ」

「女の子みたいな名前やな」

「・・・・・いうな」

何で結衣(ゆい)だよ！もっとましな名前があるじゃないか～！！

「あ、そういえばさ」

「ん？何や？」

「麻帆良学園ってある？」

「あるよ」

「・・・・・そうか」

あったよ！麻帆良学園！まさかのネギま！とリリなのの世界が一緒だったよ！！衝撃の事実だよ！！

「しかし・・・・・未来か」

「何や？結衣君は未来から来たんか？」

「いや、過去から・・・・・て」

「ん？」

なに聞いているんですか八神さん！

ガチャッ

『ただいま帰りました』

ｏｈ！この声は――――

「主、ただいま帰り・・・・・」

「はやて！ただい・・・ま・・・・・」

まさかのあの騎士！

「誰だ貴様」

「はやて！こいつまさか！」

（ジャキッ）

・・・・何か剣とハンマーを突きつけられました。

「シグナム！ヴィータ！駄目や！！」

八神さんが渇をいれる

「すみません、主はやて」

「ごめんなさい、はやて」

素直だな。

「謝るのは私や無い、結衣君や」

「「結衣君？」」

「この男の子や」

「すみません」

「ごめんなさい」

やっぱりはやてには頭が上がらないらしい。

「いや、いいよ。俺は結衣咲結衣だ」

「ヴィータ・・・・・です」

「シグナムだ。・・・・・ん、結衣咲？」

あ、やべ。

「・・・・・（ジ～）」

やっぱり覚えられていた。

「どうしたんや？シグナム」

「いえ、何でもありません（ジ～）」

いや、何でもありませんって言いながら視線をそらしていなかったら説得力無いって。・・・・・はあ、しょうがない――――

『シグナム・・・・・だっけ？』

『やはり貴様は』

『そう怒るな』

『怒こってはいない！』

『どのみち、俺は過去に帰らなきゃいけない』

『過去から？』

『そうだ。だから、この今の時の俺に聞いてくれ』

『・・・・・わかった』

とりあえず、納得してもらえたようだ。・・・・・さてと、そろそろ帰らないと――――

「じゃ、八神さん。俺はかえ「はやてや」ん？」

「はやてって呼んで」

「わかった。（バシュウッ）じゃあな、はやて、それにヴィータ、シグナム」

「「「うん（ああ）（またな）」」」

はやてside

行ってしもうたな。まだ話したかったんやけど。

ピーンポーン・・・・・

「あ、私が出るな」

「「はい（うん）」」

シャマルが帰ってきたかな？

ガチャッ

「・・・・・え？」

そこにいたのは――――

結衣　（シィ）ｓｉｄｅ

メガロメセンブリア某所

えっと・・・・・どういう事だろうか、これ？

連合指名手配

紅き翼

マクギル元老院議員殺害未遂

帝国スパイ

ナギ・スプリングフィールド

ジャック・ラカン

結衣咲シィ

３０００００００ドラクマ
その他六名
１５０００００ドラクマ
捕獲または討伐

・・・・・うそぉ。
とりあえず、予想的には紅き翼の隠れ家がある『オリンボス山』に行こう。
テレポートで行けるかな？
シュンッ

オリンボス山『紅き翼』隠れ家
シュンッ
で、出来た。正直出来るかわからなかったけどできて良かった。
『いいぜ。俺の杖と翼、アンタに預けよう』
ん？この場面ってあの２６巻の最初のかな？
「そこにいるのは誰じゃ？」
「ん？」

あ～そうだった。姿元に戻してと――――

スッ

「「「「「・・・・・あ」」」」」

「うん、やっぱり元の姿の方がいいかな？」

「シィかの？」

「そうだよ、ゼクト」

「シィ」

「ん？」

・・・・・な、何か詠春の笑顔が怖い。

「今までどこに行っていたんだ？」

「えっと、未来に　（ガクガクブルブル）」

「嘘をつくな！！」

「ひぅ！？（ビクゥッ）」

こ、怖いよ～。

「詠春、落ち着いて下さい。何らかの事情で帰れなかったのでしょう。ほら、シィがこんなに怯えていますよ？」

「うっ、すまない・・・・・シィ」

「う、うん」

「よし、シィも戻ってきたから行くか」

「どこへ？」

「・・・・・どっか」

「「「・・・・・」」」

少しでも期待した私がバカだったよ。

第４話　（番外編その２）衝撃の事実（後書き）

作者執務室

作者「・・・・・ハッ」

ヴィータ「やっと起きたか」

作者「ん、知らない天井だ」

ヴィータ「ネタはいいから」

作者「ん」

ガチャッ

シィ「あ、起きた？」

作者「いや、そこは『起きている』だろ？」

シィ「わかった」

作者「それでは、次回！」

「『闇の魔法』かぁ・・・・・」

「シィ！！」

「あれを受けたらほとんど消し飛ぶはずじゃ」

『固定率９８％・・・・・いけます』

「久々に暴れるか！」

「心配して損したわ！！」

「準備はいいですか？」

「あれ、言ってなかったっけ？私は不老不死ですよ？」

ｎｅｘｔ『闇の魔法、そして模擬戦』

シィ「何故にａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ？」

６月１９日訂正

６月２３日さらに訂正

第5話　『闇の魔法』、そして模擬戦（前書き）

作者執務室

黒一文字「・・・・・」

シグナム「どうしたんだ？作者は」

フェイト（T）「暑いのは苦手・・・・・だそうです」

なのは「そうなんだ。（かきかき）ん？」

『シグナム・フェイト・なのはへ

俺の代わりにフリスタ様へお礼を言って・・・・・』

シグナム「しょうがない」

フェイト（T）「それじゃあ――――」

なのは「せーの」

シ&フ&な「「「フリスタ様（殿）アドバイスありがとうございます」」」

第5話　『闇の魔法』、そして模擬戦

【シィside】

「・・・・・」

――――返事がないただのしかb「死んで・・・無い・・・よ・・・・・」生きていたか。by黒一文字

ど、どうも結衣咲・・・シィで・・・・す・・・・・。

――――　一体何があったというとこうです。by黒一文字

～回想スタート～

「『闇の魔法』かぁ・・・・・」

『主なら大丈夫じゃないですか？』

私はナギ達と再会して二ヶ月がたった時にふと思い出したように呟いた。

「まぁそうだね」

『死ぬ痛みはしますが』

「それは嫌なんだけど・・・」

そう、いくら不老不死でも死ぬ痛みはする。私はその事で不安だった。

『何事でもチャレンジです！』

「まぁいいかな。キリエ、オリジナルモード『ロッド（杖）』セットアップ」

『了解です、主』

注）シィのオリジナルモードのバリアジャケットは紫を主体とした服です。

「キリエ、補助お願い。魔力放出２０％」

『了解』

「ディラ・アルクス・メラーネ・・・契約により我にしたがえ高殿の王。来たれ、巨人を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆。百重千重と重なりて走れよ稲妻。『千の雷』固定――――」

『固定率９８％・・・・・行けます』

「掌・・・握！」

グッ、思っていたよりもキツい！これをネギやエヴァは使っていたの！？

『安定率・・・・・２９％！ダメです！主！！』

「いっ、あああああ！！」

【ナギｓｉｄｅ】

ズガアァァン・・・・・・

「な、なんだ！！」

今の雷だろ！なんで・・・・・・まさか！

「師匠！シィは！」

「シィならさっき雷が落ちた所じゃ！」

「くっ！」

とにかく、急いでシィのところへ行かないと！

「シィ！！」

俺達が着いたときにはシィが倒れていた。

「おいシィ！大丈夫か！」

「・・・・・」

返事がない。・・・・・嘘だろ？

『大丈夫です』

「お前はキリエ・・・・・・」

たしかでばいす？・・・だっけ？

『主はじきに目をさまします』

「そうなのか」

よ、よかった。死んでいるかと思った・・・・・。

【ｓｉｄｅｏｕｔ】

回想終了

【シィｓｉｄｅ】

「それにしてもよく生きていましたね」

アルがそんなことを言い出した。

「確かにのぅ。ナギと同じ位の魔力じゃったしの。あれを受けたらほとんど消し飛ぶはずじゃ」

ゼクトが続く。・・・・・て、あれ？さっき私が使用した魔力は２０％ぐらいだったよ？

そして、私はある点に気付く――――

「あれ、言ってなかったっけ？私は不老不死だよ？」

ピシッ

あ、固まった。なんかお約束の展開のよ――――

「「何いいいいいい！！！」」

み、耳が・・・・・

「何だよ、心配して損したわ！！」

ナギ、それでも心配して。

「わ、私は知っていましたよ？あなたと出会ってから姿が変わっていませんから」

アル、膝が笑っているよ？あの『ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！』直井文人みたいに。

「「・・・・・」」

ゼクト、詠春、帰ってきて。ゼクトはほぼ不老不死だよね？

「なるほどな・・・・・だから会員が増えているわけだ（ボソッ）」

ラカン、きこえているよ。会員って何の事？

こうしてナギの暴走、アルの強がり、ゼクトと詠春の現実逃避が落ち着くまで二時間かかった。

数日後

「え、模擬戦？」

「ああ、そうだ」

詠春がいきなり提案してきました。詠春、そんなこと言ったらダメだよ。なぜなら――――

「おお！シィと戦えるのか！」

「俺も久々に暴れるか！」

――――ナギとラカン（バカ）が戦闘狂（バトルジャンキー）だから。

「いいだろ。それぐらいは」

「まあ、いいけど・・・・・」

しょうがなく、私は了承した。

アル「準備はいいですか？」

ナ&ラ&シ&詠「「「「ＯＫ！」」」」

ゼクト「では、始めじゃ」

火蓋は切って落とされた。

・・・・次回へ！ｂｙ黒一文字

『『『『ズザァァァァァッ』』』』

第5話　『闇の魔法』、そして模擬戦（後書き）

魔法先生ネギま！ｒｏｏｍ

ナギ「作者ぁぁぁあ！！」

黒一文字「うお！何事！？」

ナギ「何だよ、あの終わらせ方！」

黒一文字「しょうがないだろ！ただでさえ駄文、文才無しだから！」

アル「そこは胸を張る所じゃないでしょう」

シィ「しょうがないよ。作者は暑さで壊れているから」

作者「うるせぇ！次回だぁ！！」

～次回予告～

『主、大丈夫ですか？』

「雷鳴剣！」

「おいおい、冗談だろ？」

「大丈夫だよね？」

「あなたもバグキャラでしたか・・・・・・」

「ここまでとは・・・・・」

「術式兵装・・・『雷天大壮』！！」

ｎｅｘｔ『大乱闘ス○ッシュブラ○ーズ』

シ＆ナ「「パクリ（かよ）！？」」

第6話　大乱闘ス〇ッシュブラ〇ーズ（前書き）

黒「戦闘描写が・・・・・・・戦闘描写があぁぁぁ！！！」

シィ「壊れちゃった・・・・作者が・・・・・・」

はやて「しょうがないん？」

シィ「・・・・・とりあえず――――」

シィ&はやて「「エミル・キャスタニエ様、カイ（海）・R・銃王様、感想ありがとうございます！」」

第6話　大乱闘ス○ッシュブラ○ーズ

～前回のあらすじ～

ナギ達と模擬戦をすることになったシィ・・・・・・

結衣咲シィ

ＶＳ

ナギ・スプリングフィールド

＆

ジャック・ラカン

＆

青山詠春

「・・・・・て、私ひとりぃぃぃっ！？」

シィは勝てるのか！？

「誰かつっこんでぇぇ！！！」

～第三者視点ｓｉｄｅ～

「それでは・・・始め！」

ドンッ

アルの掛け声で試合が始まった途端にナギ、ラカン、詠春がシィに突っ込んできた。

「行くぜ！『雷の暴風』ッ！！」

（ええ！？無詠唱！？）

ナギが先制攻撃として『雷の暴風』を撃ってきた。

（クッ、『テレポート』！）

シィはギリギリのタイミングで避ける。

「アーティファクト『千の顔を持つ英雄』！」

「ッ！？キリエ、モードオリジナル『剣（ソード）』！」

ガキキキキンッ

（って、よくそんな量の剣をその速さで投げれるね・・・・）

――――ってそういうあなたも対応できるねｂｙ神

なぜか神様まで観戦している。

「クッ、数が多い・・・・・「フッ！」っ！？」

考え事している暇を与えないと言わんばかりにどんどん追撃してくるナギチーム――――

「これで終わりだ、斬岩剣！」

ここで詠春が左から剣技を放った――――

ガキィンッ

「なっ！？」

――――が、それはシィの左腕によって止められた。

「モード双剣（ツインソード）」

そう、シィは左腕に剣を隠し持っていたのだ！ｂｙ神

アルｓｉｄｅ

・・・・・・・・

「・・・・のぅ、アルよ」

「・・・・なんでしょうか」

「先ほどから誰かの声が聞こえぬか？」

「ええ、聞こえますね」

「もしかしたらワシら以外にも誰かが見ているということじゃな？」

「ええ、そうですね」

・・・・・きずいて下さい、ゼクト。さっきから『ｂｙ神』と言っている事に。

ズドォォォォン・・・・・・・・・

「もしかして・・・・・・神様は・・・・・いるのでしょうか？」

シィｓｉｄｅ

ぐっうぅ、最強クラス二人と準最強クラス一人じゃ勝てないって。

・・・・・・しょうがない、使うか。

『（主？）』

「（キリエ・・・・『闇の魔法』を使うよ）」

『（なっ、ダメです主！）』

「（・・・・大丈夫）」

『（・・・・・・わかりました。ですが条件です）』

「（条件？）」

『（おかしいと思ったらすぐに解除してください）』

「（わかった）」

ガラッ

岩オモッ

『当然です』

キリエ、クールにつっこまないで。

「それじゃ、やりますか。キリエ、魔力放出５％」

『了解』

「ディラ・アルクス・メラーネ・・・契約により我にしたがえ高殿の王。来たれ、巨人を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆。百重千重と重なりて走れよ稲妻。『千の雷』固定――――」

『固定率９７％』

・・・・いける！

「掌握！！」

ナギｓｉｄｅ

ズドオォォォン・・・・・・・

な、なんだ？

「大方、シィが何かしたのだろう。二人とも油断するなよ？」

「わかってるって。シィ嬢ちゃんも結構つえーからな」

・・・・風が・・・・・・・・

パシィッ

「ンゴハァッ！？」

「「なっ！？」」

俺が見たものは吹き飛ばされるラカンと・・・・・・雷を纏ったシ

ィがいた。

「術式兵装・・・・『雷天大壮』！」

シィｓｉｄｅ

「ふぅ・・・・」

『主、大丈夫ですか？』

「なんとか」

「おいおい、冗談だろ？」

「冗談じゃないよ、ナギ・・・・キリエ、モード『バルディッシュザンバー』」

『了解』

私の姿がフェイト（Ｔ）そのままになる。

「ランサーセット」

『Ｇｅｔ　ｓｅｔ』

私の周りに光球が９つ現れる。

「雷鳴剣！」

詠春が刀に雷を纏わせ、つっこんでくる。

「『魔法の射手・連弾・雷の１００１矢』！」

ナギが総計１００１本の矢を放つ。

「オラァ！」

ラカンが腕を振りかぶる。

それらを――――

「「「ぐあぁぁぁ！？」」」

とあるシリーズのベクトルで操りそれぞれに返す。それの追い討ちに――――

「『フォトンランサー』・・・・・ファイヤ！」

――――雷の槍で撃つ。そして――――

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ、いま導きのもと降りきたれ・・・・バルエル・ザルエル・ブラウゼル――――」

私の周りにさっきよりも大きい光球が現れる。

「ぐっお、。な、何だあれは？」

――――そして・・・放つ！

「『サンダーフォール』ッ！！」

ズガシャアァァァァン・・・・・・・

・・・・・・

「キリエ」

『何でしょう？』

「大丈夫だよね？」

『大丈夫でしょう』

アル＆ゼクト

「「シィ――――――」」

「――――ここまでとは・・・・・」

「――――あなたもバグキャラでしたか・・・・・・」

第6話　大乱闘ス〇ッシュブラ〇ーズ（後書き）

シィ「バグとの戦闘は疲れたよ」

シグナム「・・・・・・（じ～）」

シィ「・・・・・・」

はやて「狙われとるな・・・・・シィちゃん」

ヴィータ「しょうがないよ、はやて。シグナムもナギとかと同類だから」

ナギ「ん？誰か呼んだか？」

はやて＆ヴィータ「「ううん、誰も」」

ナギ「？そうか」

シグナム『模擬戦するぞ！！』

シィ『だれかぁぁぁぁ・・・・・・・・』

はやて＆ヴィータ「「・・・・・（合掌）」」

黒「それでは次回予告！」

「へ、仮契約？」

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「見事・・・」

「いかんッ！！」

「あなたが造物主・・・・」

「フッフッフ・・・・・」

「誰だ！？」

「ナギィッ！！！」

「お前、私のも「ならないよっ！」・・・・そうか」

ｎｅｘｔ『仮契約。そして最終決戦へと』

第7話　仮契約。そして最終決戦へと（前書き）

魔法少女リリカルなのはｒｏｏｍ

なのは「いよいよ『紅き翼』編の見所なの！！」

フェイト　（Ｔ）「そうだね」

クレス「お前らの出番はまだだぞ？」

はやて「でも、私達の出番はいずれ来るんやろ？」

クレス「ああ、お前ら三人は確定。後は作者の気まぐれだ」

なのは「そうなんだ。それじゃ恒例の感想のお礼！」

４人「「「「鳴神ソラ様感想ありがとうございます」」」」

第7話　仮契約。そして最終決戦へと

シィｓｉｄｅ

「へ、仮契約？」

「そうです」

何かいきなりストレートに言われたよ。

「何で？」

「最終決戦だからです」

「・・・・・契約方法は？」

「キスです☆」

いや、わかっていたよ。でもね・・・・・まだ彼氏とかがいないのにキスなんてぇぇぇ！！

――――あなた、元は男だというの忘れているねｂｙ神

「大丈夫です」

「ふぇ？」

何か案でもあるのかな？

「ナギも初めてなので」

「余計ダメだよぉぉぉぉ！！！」

「シィ、諦めるんだ！（ガシッ）」

「えいしゅうううん！！放せぇぇぇ！！！」

詠春に後ろから羽交い締めにされた。ダメだ、動けない！・・・・・・ハッ！

「誰か助けてえぇぇ！！変態に襲われるーーー！！！」

「何て事を言うんだ、シィ！！とにかく・・・・・諦めろ　（ボソッ）」

詠春が何か言った瞬間、首筋に何かを当てられて、私は意識を闇に落とした。

目を覚ますと一枚の仮契約カードが。

「うぅ・・・・・ヒグ・・・・・初めてだったのに・・・・・」

私は一晩中枕を涙で濡らした。

次の日

「シィ、使い方は「わかってるよ」そうですか」

仮契約した次の日、アーティファクトを試すことにした。カードには私と沢山の武器が描かれている

「来たれ(アデアット)」

キーワードを言った。だが、何も出てこない。

「・・・・・もしかして」

私は刀を想像する。すると――――

ポンッ↑刀が出てくる

「「・・・・・」」

刀出てきたよ。するとアルが聞いてきた。

「これがアーティファクトですか?」

「違うと思う。私が想像したら出てきたから」

「なるほど、ラカンの『千の顔を持つ英雄』ですか」

「多分ね」

ある意味で怖いよ。同じアーティファクトって・・・・・

数日後

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ?悪の組織なんてそんなもんだ」

「そうだね。でもその周りは自動人形や召喚魔でいっぱいだよ?」

「ゲッ、マジか」

今私達は『墓守り人の宮殿』の見えるところにいる。最終決戦前だ、ナギでも真剣になってる。

「ナギ殿!帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました!」

「おう」

あの人は・・・・・・原作でアリアドネー総長になってる人だ。・・・・・名前忘れた。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ！それで、あの・・・・・ナギ殿、シィ殿」

「ん？」

「どうしたの？」

顔が赤いよ？

「ササササインをお願いできないでしょうか？」

「「いいぜ（いいよ）」」

「そ、尊敬してました」

サインを書いて渡す。・・・・・こらラカン、アル、笑うな。

「とりあえず、行くよ。ガトウさんもなるべく早くお願いします」

『わかった』

「キリエ、モード『弓（ボウ）』」

『了解です』

「リイン、ユニゾン」

「はいです！」

「「ユニゾン・イン」」

私は弓を引く。そしてキーワードを言う。

「キリエ、カートリッジロード」

ガシャンッ

ロードすると魔力で構築された矢が現れる

「リイン」

『はいです。氷の力よ、我が主に力を！』

「行くよ・・・・『アブソリュート』」

私は数キロ先の召喚魔に向け、弓を放つとその召喚魔の周り一帯を氷で覆い、砕け散った。

「行くぜ！！」

ナギの声で全軍突撃した。

三人称ｓｉｄｅ

墓所に着くと仲間を連れたアールウェンクスがいた。

「やあ『千の呪文の男』またあったね。そして初めまして、『幾多の武器の少女』。僕達もこの半年で君達に随分数を減らされてしまったよ。この辺りでケリにしよう」

「ナギ、私は姫子ちゃんのところに行くから！」

「おう！」

「行かせると思うかい？」

アールウェンクスがそう言うと石の槍が数本シィに飛ばされる。しかし――――

「遅いよ！」

すべてかわし、奥に行く。

シィｓｉｄｅ

「・・・・・・どこ？」

しばらく歩いたら迷ってしまったよ。どうしようか・・・・・・て、あれは・・・・・・

「ほう、人形共と戦っていたのでは？」

・・・・・いましたよ造物主。どうしよう・・・・・選択肢は――――

・戦う
・話す
・逃げ・・・・・られない

――――逃げられないの！？でも、話すがあってよかった。

「あなたが造物主・・・・」

「そうとも呼ばれてる・・・・ふむ」

「・・・・・？」

イメージ的には顎に手を当て何か考えているポーズだね。え、何でイメージかだって？だって顔見えないし・・・・

「おい」

「・・・・・・はい」

「お前、私のも「ならないよっ！」・・・・そうか」

納得した感じになると造物主は後ろに魔法陣を展開し、砲撃を放つ。

「っ！？『フォースフィールド』！！」

何でも防ぐフィールドを張り、砲撃を防ぐ。

「見事・・・」

「どうっもっ！！」

私は外へ逃げたが造物主は来なかった・・・・・

ナギｓｉｄｅ

「見事・・・理不尽なまでの強さだ」

「黄昏の姫御子は・・・どこだ？消える前に吐け」

俺はボロボロだが白髪の奴を戦闘不能にした。姫子ちゃんの事を聞こうとしたが――――

「フ・・フフフ・・・・まさか君はいまだに僕がすべての黒幕だと思っているのかい？」

「なん・・・だと？」

――――こんな答えが返ってきた。黒幕がこいつじゃない？

バスッ

・・・・・なっ！？

「ナ・・・ナギィ！！！」

シィｓｉｄｅ

「っ！？遅かった！？」

私が着いた頃にはナギとアールウェンクスが打ち抜かれていた。

「誰だ！？」

ラカンが向いた先には、先ほど私が見たときには追いかけてなかった筈の造物主がいた。しかもさっきよりも莫大な魔力を感じた。

「いかんッ！！」

やばい。ゼクトの『最強防護』やラカンの『気合防御』で防げる魔力じゃない。私は縮地で移動し――――

「「シィ（シィ嬢ちゃん）！」」

「くっ！？最大魔力！『フォースフィールド』！！」

その瞬間膨大な魔力砲が放たれた。

「・・・・・・う・・・ぅん・・・・・・・」

・・・・・あれ？ここは・・・・・

「目を覚ましましたか？」

横を見るとアルがいた。

「アル、どうなったの？」

話を聞くと私は結果的に防ぎきり、そのまま魔力切れで倒れたらしい。その後、ナギとゼクトが造物主を追い、倒したがゼクトが戻らなかった。

「・・・・結局、私は何も出来なかった・・・・か・・・・・」

「そうでもないです。あなたは私達を守ってくれたじゃないですか」

「・・・・・そうだね。それよりアル、何かあるでしょ？」

「ええ。終戦と世界が救われた記念式典です」

「面倒くさいなぁ。でも行かないと」

私は体の異常がないか確かめ、下に降りた。

第7話　仮契約。そして最終決戦へと（後書き）

作者執務室

クレス「シィはまだ寝てるのか？」

黒「ああ、雑談所で魔力ほとんど使い切ったからな」

クレス「この小説でも魔力切れ起こしてるからな。休ませようか」

黒「ああ。では次回！」

「ここで死ね！」

「ナギは一体どこにいるやら」

「『おわるせかい』」

「『千の雷』！」

「なるほど、二番目と言う事なんだね」

ｎｅｘｔ『二番目始動』

クレス「恐らく他の小説では書かれていない二番目のアールウェンクスの登場だ。次回も楽しみにしてくれ」

第8話　二番目始動（前書き）

オリジナルｒｏｏｍ

シィ「クレス、おかわり」

クレス「ほい」

ルナ「・・・・・」

黒「どうした？ルナ」

ルナ「うん・・・・・」

シィ「おかわり」

クレス「ほい」

ルナ「どうしてあんなに食べれるかなって」

黒「しょうがないって」

シィ「おかわり」←これでカレー１０４杯目

黒「しょうがない。ルナ、感謝コーナー」

黒＆ルナ「「光闇雪様、鳴神ソラ様、感想ありがとうございます」」

黒「今回は短いですが本編どうぞ」

第8話　二番目始動

シィside

「『ルインクラスト』」

ズドドドドドドォォォォォン・・・・・

『ぐあぁぁぁぁぁ！？』

『やめろっ！？やめてくれっ！？』

正直うざったい。

「えつげないですね。シィ」

「別にいいじゃん」

私たちはケラベラス渓谷に来て、アリカ様救出作戦を実行していた。

まあ、一方的な虐殺だけどね。あ、一応非殺傷だよ？殺したらいけないからね。

「私ちょっと用事があるからこのまま抜けるね」

「はい」

これが5年前の出来事だ。ん、何でこんなに時間が跳躍しているのかだって？それはわからないよ。結局ナギとアリカさｍ・・・・・アリカさんは婚約したし。でも、わかったことがある。それは――――

「貴様が『幾多の武器の少女』か？」

「何かな？」

――――命を狙われている。気配からして二人かな。殺気もある。

「ここで死ね！」

雷撃が飛んできた。ん、よく見るとアールウェンクスと似ている上

に服が同じだ。もしかして・・・・・・あれか。

「なるほど、二番目と言うことだね」

一番目と攻撃方法が違うのはワンパターンにならないためだろう。

「ヴィシュタル・リ・シュタル・ヴァンゲイド。契約により我に従え高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆。百重千重と重なりて走れよ稲妻！！――――」

不味いな。ナギランクの魔力だ。どうしようかな？

「『千の雷』！」

とりあえず避けよう。

バックステップをするとそこに雷が。

「――――『おわるせかい』」

・・・・・あ、やば

パキャアァァァン・・・・・・

・・・・・閉じ込められたよ。でも、大丈夫かな？

――――『フレアストーム』

「なっ「・・・っ」！？」

氷の中心から炎の渦をだし、氷を溶かす。でも――――

「あ～ダメだ。中心部しか溶けなかった・・・・・」

――――今言った通り、溶けたのは中心部のみ。閉じ込められた感じかな。時間がかかると普通の人は凍死する。

「フ、そのまま凍死するがいい」

そう言って、二番目と髪が長い人はどこかに行ってしまった。

・・・・・アホでしょ？

シュンッ（テレポートで脱出）

「ナギは一体どこにいるやら」

私はどこかへと歩き出した。

ナギｓｉｄｅ

「ヘックシッ」

「む、どうしたんじゃ？」

「さぁ、誰かが噂したんじゃないか」

「ナギ、必ず三年後だぞ？」

「おう」

第８話　二番目始動（後書き）

作者執務室

クレス「作者。この小説ＰＶ１５０００、ユニーク５０００越えたぞ」

黒「・・・・・・（絶句）」

クレス「ふむ、こんな駄文を読んでくれてありがとうございます・・・・・と」

黒「・・・・・・（コクコク）」

クレス「いい加減喋れ。『ラグナロック』」

ズガァァァァァン・・・・・・

「・・・・・」←黒一文字だったもの

クレス「作者が死んだから次回予告だ」

「ぬらりひょん！？」

「エヴァンジェリンだ」

「よろしくのぅ」

「久し振りですね」

「よろしく、結衣咲先生」

「無茶です。こんな子供に」

「これが地図です」

「摩訶不思議な場所だよここはーーーー！！！！」

ｎｅｘｔ『麻帆良学園』

クレス「因みに原作にはまだ入らない。２番目襲撃の２年後だ」

第9話　麻帆良学園（前書き）

黒「更新が遅れてすみません」

シィ「そして次回予告は無視になりましたのですみません」

黒「それでは本編をどうぞ」

第9話　麻帆良学園

「おい、○○！」

誰だろ？聞き覚えがある

「○○君、帰るよ」

「ああ、わかったわかった。だから引っ張るな」

・・・・思い出した。これは――――

「っ！？二人とも！！」

「「？」」

キキードンッ

――――俺（わたし）の記憶だ。

シィｓｉｄｅ

「・・・・・」

夢から起きると目の前に木が見える。麻帆良学園は近くにあるが夜に行くと怪しまれるため、野宿をしたのだ。

『おはようございます、主』

「おはようです！」

「おはよう、キリエ、リイン」

挨拶をするキリエに挨拶をし起きようとするが動かない。何でだろ？

『主、地面に寝ていたからでは？』

ああ、納得。

「よし、行こう。リイン、キリエ」

「『はい（です！）』」

・

「で、貴様は誰だ？」

はい、只今麻帆良中学の学園長室に来た瞬間金髪幼女に絡まれました

「幼女言うな！！」

心読めたんだね

「私の名前は結衣咲シィだよ」

「何だと！？」

名前言ったら顔を青ざめながら驚かれた。・・・・・何で？

「あ、あの『幾多の武器の少女』や『何あの子致命傷なのに来るんだけど！？』の結衣咲シィか！？」

うん、間違っちゃいない。後者の二つ名は大戦中に失敗して胸に風穴開けられたときだね。

「そうだけど・・・・・実演しようか？風穴開けてからゾンビみたいに這いつくばるの」

「やらんでいいわ！！」

ああ、面白いな

「たく・・・・・私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。真祖の吸血鬼だ」

「へ～」

「・・・・・驚かないのか？」

「別に・・・・・私のまわりには化け物揃いだから」
ナギとかジャックとかナギとかジャックとか・・・・・・
「うっほん！もうよろしいかの？」
そこには頭の長い妖怪ぬらりひょんがいた」
「聞こえとるぞい・・・・・」
あ、座って『の』の字を書き始めた
「おいジジイ。いじけていないで話しろ」
「そうだね。早くしてください、ジジイ長」
「その呼び方は一番酷いぞ！！」
「結衣咲・・・・・それは流石に酷いな・・・・・」
あら？何か不評だね
「というわけでナギは？」
「バッサリ来たな。ナギならとっくに行ったぞ」
「何処に？」
「さあな」

むぅ、聞きたいことがあったのに・・・・・・

・・・・・・あ

「用事思い出した。学園長、教師になる話はまた今度に」

私がそう言うと学園長は書類を持ったまま固まった。

「じゃあね～」

私はテレポートである場所に向かった

・・・・・・・・・・・・・・・

シュンッ

「アル〜！いる〜！？」

「はい。お久し振りです。シィ」

え〜と、ここは図書館島の地下だね

「どうやってここがわかったのですか？」

「勘」

「勘に頼るのはラカンだけにして下さい」

「いいじゃん、勘も大切だよ。ん、この紅茶はいいね」

「ありがとうございます」

アルの入れるものは殆んど美味しいからね

「さてと・・・行こうかな？」

「何処にですか？」

「造物主の所」

ピシッ

あ、アルが固まった

「シィ、冗談はよしてください」

「冗談だよ・・・・・1％」

「殆んど本気じゃないですか！？」

「大丈夫だよ」

私はアルに優しく笑う

「私は絶対に帰ってくるよ。キリエ、モード『造物主の掟（コード・オブ・ザ・ライフメイカー）』」

『了解です』

「なっ！？」

起動すると私は黒マントに包まれる。何故かキリエに組み込まれていたモードがあった。調べてみたら『造物主の掟』、それも『最後（グレートグラン）の鍵（ドマスターキー）』だった。あっていいのかな？

「行ってきます、アル」

「・・・・・お気をつけて、シィ」

「うん・・・・・『リケロード』。造物主の元へ」

私は魔法世界に行った

第9話　麻帆良学園（後書き）

皆「「「・・・・・」」」

クレス「急展開だな」

黒「ああ、凄く後悔した」

シィ「うん、何でキリエに『造物主の掟』があるのかな？」

黒「ああ。俺の作品の一つ『少年は魔法少女と出会う』の登場人物でシィモデルが入れ込んだ」

シィ「私モデルか・・・・・」

黒「それでは次回第１０話『少女の決意』・・・・・」

皆「「「おたのしみに！」」」

第１０話　少女の決意（前書き）

今回は後半部分に〇ロが含まれていますので注意です

鳴神ソラさん感想ありがとうございます

第１０話　少女の決意

シィside

シュンッ

「・・・・・久し振りだね。ここに来るの」

墓守り人の神殿。魔法世界の大戦の終結した場所・・・・・

「さて・・・・・『リケロード』」

私は神殿内に入った

・・・・・

「む、お前は・・・・・」

「久し振りだね、デュナミス。大戦以来かな？」

「そうだな」

中に入ると紅茶を飲んでいるデュナミスがいた。まぁ、好都合かな

「造物主に会いたいんだけど」

「ブッ！」

「うわっ！？汚なっ！？」

「お前は直球で来るんだな」

「わざわざ遠回しで言う必要ある？」

面倒だし・・・・・

「・・・・・」

念話中だね

「よし、この奥に主がいる」

「ん、わかった」

以外とすんなり行けたね。あ、デュナミスに伝えないと――

「デュナミス、二番目何とかならない？」

「どういう意味だ？」

どういうってね～

「頭」

「それができたら苦労はしないな」

デュナミスも悩み人らしい。

そう考えながら造物主の元へ向かった

・・・・・・・・・・・・・・・

しばらく歩くと広い場所に出た。確かここは・・・・・ジャックとフェイトがお茶していた場所だっけ？原作知識が曖昧になってきたよ

「お前は確か・・・・・」

「久し振り、造物主」

ゼクトの体で紅茶を飲んでいる造物主を発見した

「まぁ、今日は交渉に来たんだけどね」

「交渉だと？」

「うん、それはね――――

私の体と引き換えにゼクトを解放して欲しい」

「何故だ？」

「・・・・・私にはこの世界を魔力枯渇しない計画（プラン）がある」

「それはあり得ない。『完全なる世界』に封じないとこの世界は救われ――――」

「それは違うね」

造物主の言葉を遮る

「『黄昏の姫御子』の力・・・・・・」

「『完全魔法無効化（マジックキャンセル）』か・・・・・・」

「うん。その能力を逆手に取り、魔力枯渇を防ぐことが出来る」

「・・・・・・」

まあ、ここの原作知識は無い。何しろフェイトとネギが仲直り？しところまでしか読んでいないからね

「・・・・・わかった」

「いいの？騙しているかもしれないのに？」

「賭けてみたくなった・・・・・としか言えないな」

わお、私は考えをねじ曲げないと思っていたんだけどね。そう考え

ていると造物主の身体から黒いものが出てきて、その黒いものが抜けたゼクトの身体が倒れたので支えてあげた。寝かせた後、黒いもの・・・・・造物主と向き合う

「じゃあ、始めようか」

「ああ」

黒いものが私に入ってきたとき――

ドクンッ

「ぐっ！？あっ！？」

いきなり胸が苦しくなり、意識を失った。失う前にゼクトが目をさましたように見えた

・・・・・

・・・・・・

「・・・・・・」

目をさますと真っ白な空間にいた。何も音は無く、ただ真っ白な世界に・・・・・・

「造物主・・・・・・」

「何だ？」

造物主に呼び掛けると目の前に黒の布を被った・・・・・・アリカさんに似た人がいた

「あなたは・・・・・・アリカさん？」

「それは私の今の子孫だ。私の名はアマテル」

「・・・・・ゼクトは？」

「あの者なら既に目が覚めていると思うぞ」

「ならいいや。造物主・・・・・いや、アマテルさん」

「何だ？」

「改めて、力を貸してください」

「いや、協力するのは私の方だ。私には考えることができなかった案を提案してくれたからな」

「そうだね。じゃあよろしく」

「ああ。ところで敬語とタメ口が交互になっていないか？」

あ・・・・・

「・・・・・てへ☆」

「・・・・・」

「それじゃ！」

「何だ？」

「そりゃあ！！」

「なっ！？」

私はアマテルに飛び掛かる

「あはは～！」

「いや！ちょっ、やめ！あ、胸揉むなっ！？／／／／／」

「にゃはははは！！」

「いやぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「／／／／／」
「あ～面白かった！」
「人で遊ぶではない！／／／／／」
「アマテルも乙女だね～」
「・・・・・」
「ん？」
「そりゃあ！！」
「にゃ！？」
「仕返しだ！！！」
「えっ！？ちょっとまひゃん！？／／／／／」
「お前は弄りがいがあるな」
「私の名前は結衣咲シィだよ！て、弄り！？何しようとするのさ！

？」

「ん？弄り」

「なんでさ！？あ、ふぁん！／／／／／」

「ほれ、ここに息を吹けば・・・・・」

「ちょっとやめ！？ふぁぁぁあ！？／／／／／」

『お主等いい加減に――』

「「ん（ふぇ）？」」

『――せんか！！』

その後起きたら顔を赤く染めて倒れている二番目（バカ）と同じく顔を赤く染めたゼクトがハリセン（鋼鉄ｖｅｒ）を持っていたので――

「『何かすみません』」

アマテルと共に謝った

第１０話　少女の決意（後書き）

クレス「お前ら何やってんだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

シィ「だ、だって面白そうだったから／／／／／」

黒「元男なのにな」

シィ「黒、少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか（ガシッ）」

黒「え、ちょっ、ちょっとま――」

ギャァァァァァァ！！

や、やめろ！止めてー！？死ぬー！！

ああ、ごめん。痛いの？痛いよね～。あはははは！

シィ！ごめんなさぁぁぁぁぁぁぁい！！！

クレス「何やってんだか・・・・・次回『それは不思議な出会い？』

ネギま編5年前兼リリなの無印編スタートだ・・・・・て、とびすぎだろ！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9132t/

第二の人生は波乱の人生！？

2011年11月13日08時49分発行